

とくしゅう
特集

だい かいとくべつてん
第60回特別展

たようせい う がっこう
多様性を受けとめる学校づくりのために

ディーイーアンドアイ かんてん み なお
～DE & Iの観点で“あたりまえ”を見直す～

かい き
会 期

ねん がつ にち ど ねん がつ にち にち
2025年12月6日(土)～2026年3月29日(日)

きゅうかん び だい げつよう び のぞ げつよう び げつよう び しゅく
9:00～17:00 休館日は第4月曜日を除く月曜日、月曜日が祝

じつ ばあい よくじつ
日の場合は翌日

ねんまつねんし きゅうかん び
年末年始の休館日は12/28～1/5

かい じょう
会 場

ふくおかけんじんけんけいはつじょうほう
福岡県人権啓発情報センター

かす が し はらまちさんちよう め ばん ごう かい とくべつてん じしつ
春日市原町三丁目1番1号 クローバープラザ7階 特別展示室

にゅうじょうりよう
入 場 料

おとな えん こうこう だいがくせい えん
大人200円／高校・大学生100円

ちゅうがくせい い か さいいじょう しょうがいしゃ て ちようとう も かた むりよう
中学生以下・65歳以上、障害者手帳等をお持ちの方は無料

しゅ さい
主 催

ふくおかけん こうざい ふくおかけんじんけんけいはつじょうほう
福岡県、(公財)福岡県人権啓発情報センター

こう えん
後 援

ふくおかけんきょういく いんかい ふくおかけんじんけんけいはつかつどう きょう ぎ かい
福岡県教育委員会、福岡県人権啓発活動ネットワーク協議会

き かく
企 画

とうきょう と こうざい ふくおかけんじんけんけいはつじょうほう
Demo(東京都)／(公財)福岡県人権啓発情報センター

がっこう
学校に、みんながあんしんできる“ふつう”を。

がっこう きょうしつ
学校・教室には、さまざまな「ちがい」を持った子どもたちがいます。

そのなかには、いま かんきょう あ 生きづらさを感じている子もいます。

すべての子が「ここにいていい」と感じられる学校にするために、大人にできることって？

DE&I をキーワードに、みなさんとかんがえます。

ディーイーアンドアイ

DE & I とは・・・

たようせい
多様性(Diversity)

こうせい
公正(Equity)

ほうせつ
包摂(Inclusion)の

かしら もじ く あ ことば
頭文字を組み合わせた言葉。

こと 異なるバックグラウンドや特性をもった個人が

びょうどう そんちよう さん か かんきょう
平等に尊重され、参加できる環境をめざす

してん と く
視点や取り組みのこと。



とくべつてん み 特別展の見どころ

み 見どころ① ようこそ！学校DE&I の世界へ

からだのはたらき、^ごかん^{かん}かた^{せい}べつ^す好きになる人、^{ひと}ルーツや文化、^{ぶん}か^か家
族のかたちや^{じょうたい}状態、得意なこと・苦手なこと・・・など、^こ子どもたちは^{ひとり}一人ひと
り、それぞれの“ふつう”を^い生きています。学校にすでにある、^{がっこう}豊かな^{ゆた}多様^{たよう}
^{せい}性をパネルで^み見える^か化します。

み 見どころ② 学校に“バリア”がある？

かつて^こ子どもだったマイノリティ性^{せい}を持つ^も当事者^{とうじしゃ}にインタビューをおこな
い、^{がっこう}学校で^{かん}感じたバリア、^{こま}困りごとを^{かた}語っていただきました。当事者^{とうじしゃ}が^{かん}感じた
^{がっこう}学校のバリアをパネルと^{げんぶつてん}現物展示^じで^{つたいけん}追体験^{けん}していただきます。

み 見どころ③ 学校DE&I を広げよう～見方・考え方・好事例～

^{がっこう}学校でDE&Iを^{すす}進めるうえで^{やく}役に^た立つ・^お押さえておきたい^{ちしき}知識や^{かんが}考^{かた}え方をわ
かりやすく^{かいせつ}解説^{せつ}します。また、^{がっこうげん}学校現場^ばやその^{さき}先の^{しゅうろう}就^ば労^{せんしんてき}の場^ばにおける^{せんしんてき}先進的
^とな^く取り組みも^{しょうかい}紹介^{らいじょうしゃ}。来場者^{みな}の皆さんが「^じ自分^{げん}の現場^ばで^{かんが}できること」を^{かんが}考^{かた}え
られるコーナーです。

とくべつてん 特別展のプロデュースは「Demo」

とくべつてん てんじ せいさく
特別展の展示・制作には、「Demo」
だいひょう たけだ みどり
代表の武田緑さんとメンバーの
よしかわひろ
吉川寛さん
さんか
に参加いただきました。

てんじ くうかん
また展示・空間デザインは、シーグレイプデザイン
ごうどうがいしゃ ふくおか し
合同会社（福岡市）。
かいじょう
会場

きょうしつ さいげん ひかく
に教室を2つ再現し、比較することで
がっこう
学校の“ふつう”を
と なお たいけん
問い直す体験をし
ていただきます。

だいひょう たけだ みどり がっこう
Demo：代表／武田緑（学校DE&I
しよざい とうきょうと
コンサルタント） 所在／東京都
と く がっこう
DE&Iの取り組みを学校をはじめとする
きょういく げんば とど
教育の現場に届けるために、
じょうほうはっしん けいはつ
情報発信や啓発、
げんば ばんそうし えん
現場への伴走支援をおこなっている。

と あ
お問い合わせ
こうえきざいだんほうじん ふくおかけんじんけんけいはつじょうほう
公益財団法人 福岡県人権啓発情報センター

<https://www.fukuokaken-jinken.or.jp>

TEL:092-584-1271

かいじょう
会場アクセス クローバープラザ7F

か ごしまほんせん かすが えき
JR鹿児島本線「春日」駅から90m

にしてつてんじんおおむ たせん かすがはる えき
西鉄天神大牟田線「春日原」駅から720m



がっこう 学校DE&I がめざすもの



がっこう
学校DE&I コンサルタント

だいひょう
Demo 代表

たけだ みどり
武田 緑 さん

がっこう
学校における DE&I（多様性・公正・包摂）をテーマに、
けんしゅう こうえん しつぱつ
研修・講演・執筆、ワークショップ、教職員への伴奏支援に
とく
取り組む。NPO法人School Voice Project を教職員らと設立
し、げんり じけん じむ きょくちょう
現理事兼事務局 長。著書に『よんでたび
いろ きょういく
色とりどりの教育』ほか。

Ⅰ「違い」を前提にするところか

はじ
ら始まる

いま、がっこうげんば
学校現場では「多様性」や
「インクルージョン」という言葉に
ふ さい かい ぶ
触れる機会が増えてきました。しか
し、ひび じっせん お こ
日々の実践に落とし込むとな
と、けっきょく と く
「結局 どう取り組めばいいの
か」と立ち止まってしまう先生も少
なくありません。わたし、がっこう
学校DE&I の
しゅっぱつてん
出発点は、「ひと ちが
人はもともと違う」と
いうあたり前の事実を前提にするこ
とだと考えています。

た ようせい
多様性（Diversity）は“めざ
める
める”ではなく、すでにそこにそんざい
存在し
ているものです。こくせき せいべつ がくしゅう
国籍、性別、学習

のスタイル、のう とくせい ぶん か ち
のスタイル、脳の特性、文化、価値

かん かんじょう うご かた み ちが
観、感情の動き方……。見える違い

もあれば、み ちが
見え違いもありま
す。まず「ちが
違いはあるものだ」とい
うぜんてい た
前提に立つことで、はじめてこど
もたちがあんしん かんきょう
安心してできる環境づくりの土
だい う
台が生まれます。

いっぼう ほうせつ
一方、包摂（Inclusion）は“めざ
める
める”

つづ もくひょう
し続ける目標”です。しゃかいかつどう か
社会活動家の

ゆ あさまこと しゃかいてきほうせつ い ば
湯浅誠さんは、社会的包摂を「居場

しょ で ばん じょうたい
所」と「出番」がある状態と、シン

ぷるにせつめい
プルに説明されました。ありのまま

じ ぶん じ ぶん
の自分でいてよく、かつ自分らしく

さん か かんきょう ほっきょくせい
参加できる環境。それは北極星の

ようなもので、そこをめざ ちようせい
目指して調整

つづ じゅうよう
し続けていく...ということが重要

です。そして、包摂^{ほうせつ}の状 態^{じょうたい}に近づく
ための道^{みち}しるべとなるのが、公正^{こうせい}
(Equity) の視 点^{してん}です。

2 「個人^{こじん}に合^あわせる」だけでは変^か わらない理 由^{りゆう}

公正^{こうせい}を考 える際^{かんがさい}によく紹 介^{しょうかい}され
るのが、背^せの高^{たか}さの違^{ちが}う子^こどもに箱^{はこ}
を配^{くば}るイラストです。これは公 平^{こうへい}と
公正^{こうせい}の違^{ちが}いを理 解^{りかい}する入 口^{いりぐち}になりま
すが、私^{わたし}は少 少^{すこ}物 足^{ものた}りなさを感 じ^{かん}て
います。なぜなら、公 正^{こうせい}とは単^{たん}なる
“個 別^{こべつたいおう}対 応^{たいおう}”を指^さすのではなく、
「社 会^{しゃかい}や学 校^{がっこう}にある構 造^{こうぞう}的^{てき}な不 均 衡^{ふきんこう}
を是 正^{ぜせい}していく」というベクトルそ
のものだからです。

公 正^{こうせい}を实 現^{じつげん}する手 立^{てだ}ては、大 き^{おお}く
二つあります。一つは個 別^{こべつてき}的^{てき}な「合^{ごう}

理 的^{りてき}配 慮^{はいりょ}」。もう一つは、構 造^{こうぞう}そのも
のを見 直^{みなお}し、最 初^{さいしょ}から多 様^{たよう}な子^この
存 在^{そんざい}を想 定^{そうてい}して整 える「基 礎^{きそ}的^{てき}環^{かん}
境 整 備^{きょうせいび}」です。これらの背 景^{はいけい}にある
のが「障 害^{しょうがい}の社 会^{しゃかい}モデ ル^{もでる}」の考 え^{かんが}
かた 方^{かた}です。

社 会^{しゃかい}モデ ル^{もでる}では、困 り^{こま}ごとの原 因^{げんいん}
を「その人 固 有^{ひとこゆう}の特 徴^{とくちょう}や事 情^{じじょう}」で
はなく「環 境^{かんきよう}側^{がわ}」に求 め^{もと}めます。例 え^{たと}
ば、車 椅子^{くるまいす}の子^こが移 動^{いどう}できないのは
本 人^{ほんにん}の問 題^{もんだい}ではなく、学 校^{がっこう}にスロ ー
プがないから。授 業^{じゅぎょう}中^{ちゅう}にじっとし
ていられない子^こが困 っ^{こま}ているのは
「45分 座^{ふんすわ}って 話^{はなし}を聞^きくのがふつう」
という“授 業^{じゅぎょう}スタ イル^{スタイル}”だからかも
しれない、というふうに。

合 理 的^{ごうりてき}配 慮^{はいりょ}だけでは、個 人^{こじん}の問 題^{もんだい}

に見えてしまい、結果として「かわ
いそうだから特別に」という“お情
け”になりかねません。そうではな
く、「今のふつう」を疑い、環境の
前提やルール・仕組みをアップデー
トしていくことこそが、学校DE&I の
核心だと感じています。

3 「今のふつう」をアップデート していく

私は研修で「今のふつう」を見
直す練習」を先生たちとよく行い
ます。例えば、「板書が追いつかな
い」「立ったり動いたりしたくなる」
「性別違和があって男女別の着替え
がきつい」「外国にルーツがあり、ピ
アスをしている」といった子どもの
困りごとがあったとき、その背景に

あるバリアと一緒に洗い出します。

バリアには「物理的」「制度的」
「文化的」「意識的」の4種類があり
ます。ルールや慣例、暗黙の了解も
バリアになり得ます。例えば、宿題
がづらい場合も、量なのか、期限な
のか、家の環境なのか、その子にと
っての困難は一人ひとり異なりま
す。丁寧に聞き取ることで、宿題の
役割や目的を確認しつつアップデー
トできる方法が見えてきます。

重要なのは、改善案を単純化し
ないことです。「宿題をなくす」「ピ
アスを許可する」といった“ゼロか
100か”の議論ではなく（その選択肢
も最初から除外しない方がよいとは
おもいますが）、課題の本質を細かく捉

え、子どもの声を頼りに具体策を探
していく。こうしたプロセスこそ
が、教室のインクルージョンを大き
く前進させます。

4 先生自身もまた構造の中で苦し んでいる

学校DE&I を語るとき、忘れてはな
らないことがあります。それは、
先生たち自身もまた、学校という組
織の構造の中で抑圧されているとい
うことです。

どれほど DE&I の視点が大切だと思
っていても、忙しさや制度の枠組
み、校内文化の中で身動きが取れな
くなることは少なくありません。「あ
の先生は理解がない」と決めつける

のではなく、「その先生も、構造の犠
牲者かもしれない」と捉え直すこと
も重要だと感じています。

私 に関わる NPO 法人 School Voice

Project では、先生自身が“声を取り
戻す”ことを大切にしています。

大人自身が構造を変えられる実感
も 持てることは、子どもへの関わり
に 必ずつながるはずです。

5 「優しさの半分は知識」

一学び続ける姿勢こそ 出発点

教室には、見た目では分からない
背景を持つ子がたくさんいます。

外国ルーツの子、発達特性のある

子、トランスジェンダーの子、

同性愛の子……。先生の何気ない言

葉や態度が、子どもを傷つけること

もあれば、救うこともあります。

だからこそ必要なのが、「知ろうと

する姿勢」です。完璧な知識を身に

つけるということは難しいです。

私もできていません。それでもまず

は「知ろうとすること」。それが、子

どもたちの安心につながります。

同時に、「DE&Iを大切にしてい

る」と明確に語ることも、信頼の第

一歩です。「見落とすこともあるから

教えてほしい」と伝えることで、子

どもは自分の困りごとを言葉にしや

すくなります。

6 マジョリティ特権を自覚すると

いうこと

学校は、さまざまな面で“マジョ

リティ仕様”になっています。男女

二択の名簿、健康者を前提とした施

設、日本文化を前提とした規範。悪

意がなくても、そこには力の不均衡

が生まれます。マジョリティである

ことは、それ自体は別に罪でも悪で

もありません。特権 (privilege)

とは“たまたまラッキーだった側に

いる”というだけのこと。問題は、

それに気づかず、無自覚に他者を傷

つけてしまうことです。

特権は、使い方次第で社会を良く

する力にもなります。例えば、差別

的な発言があったとき、当事者では

ない人が「それはおかしい」と言う

ことで場の空気が変わることがあり

ます。これは、マジョリティが特権

を使って公正に寄与する1つの方法

と言えます。

そして、子どももまた、大人との
関係性においてマイノリティである
と言えます。だからこそ、学校に
DE&I を取り入れる際には、まず
「大人の特権」を自覚し、子どもの
声が聴ける環境や関係性をつくって
いくことは不可欠です。

7 学校DE&I がめざす未来

学校DE&I がめざすのは、「誰一人取
り残されない教室」をつくること。
すべての子どもに「居場所」と「出
番」があり、安心して自分らしく学
べる環境です。

その実現のためには、

- 社会モデルで物事を見ること
- 子どもの声を聴くこと
- 先生自身の声を大切にすること
- 知ろうとし続ける姿勢
- マジョリティ特権の理解

といった要素が欠かせません。

インクルージョンは一朝一タで

完成するものではありません。しか

し、方向さえ間違えなければ、学校

は少しずつでも変わっていけると思

います。私も、子どもたちが「ここ

なら大丈夫」と思える学校を、

先生方とともに一歩ずつつくってい

けたらと願っています。

学校文化の転換から大人社会を 考 える

—不登校の子どもは何ひとつ悪くない—



福岡県立小郡高等学校

みらい創造コース担当／

九州大学 教職課程担当

宮原 清 さん

昭和63年度から福岡県立高校に勤務。平成8年11月1日付で県立博多青松高校開校準備室に在籍し、同校に16年、夜間定時制教頭を2年、県教育センター教育相談班主任に2年、県立西田川高校を全日制から筑豊地区初の定時制単位制高校に改編する業務を校長として5年務めるなど、足掛け26年間、不登校支援などの困りのある子どもの支援にあたる。現在、公立高校全国初の「学びの多様化学校」である県立小郡高校みらい創造コースを担当するとともに、九州大学で教職課程を履修する学生支援にあたっている。

昨今の『不登校児童生徒の急増』

あなたはどのよう理解しますか？

福岡県の不登校児童生徒数（小・中・高・生）は、19,602人となり、コロナ禍以前と比較して3倍近くになります。（文部科学省 令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査から）

中学校）は、19,602人となり、コロナ

ナ禍以前と比較して3倍近くになります

す。（文部科学省 令和6年度児童生徒

徒の問題行動・不登校等生徒指導上

の諸課題に関する調査から）

1 我慢を強いられ続けた子どもたち

私自身、縁あって25年間の不登

校支援、そのうち21年間に占める

2校の定時制単位制高校づくりの機

会をいただきましたが、それは不登

校のメカニズムを学ぶ貴重な時間で

もありました。そこでわかったこと

は、不登校を経験したかなりの割合

の子たちが、「学びたい」と心から

願っており、学校・学級の環境が

変われば、満面の笑顔で学べるよう

になる場合も少なくないということ

です。



「不登校^{ふとうこう}の子ども^こは何ひとつ^{なに}悪く^{わる}
ない」

コロナ禍^かより前^{まえ}の学校・学級^{がっこう がっきゅう}の環^{かん}
境^{きょう}に、心^{こころ}から生きづらさ^いを感じて^{かん}
いた子どもたち。その子どもたち
は、実はかなりの無理^{むり}を強^しいられて
いました。しかしながら「無理^{むり}を強^し
いている」という事実^{じじつ}に、ほとんど
の大人^{おとな}が気づいていませんでした。

不登校^{ふとうこう}はその子どもたちの課題^{かだい}であ
ると信^{しん}じて疑^{うたが}わない空気^{くうき}さえありま
した。

たとえばきわめて繊細^{せんさい}な感覚^{かんかく}をもつ
HSP（Highly Sensitive Person）
傾向^{けいこう}の人（子ども^{ひと}の場合はHSC^{こ ばあい}
（Highly Sensitive Child）と表^{あらわ}
示^{あらわ}がある）は、その発見者^{はっけんしゃ}である
エレイン・N・アーロン氏^しによれば、

これらは病^{びょう}気^きでも障^{しょう}害^{がい}でもなく、
性格傾向^{せいかくけいこう}であり、全人口^{ぜんじんこう}の15%から
20%にも及^{およ}ぶとされています。近年^{きんねん}
HSP^{かん}に関する知見^{ちけん}もかなり見^みられるよ
うになり、そうした傾向^{けいこう}が強^{つよ}い人^{ひと}ほ
ど学校^{がっこう}になじみにくかったり、強^{つよ}い
ストレス^{かん}を感じやすかったりする
傾向^{けいこう}があることが指摘^{してき}されていま
す。

HSP傾向^{けいこう}の児童生徒^{じどうせい}に限^{かぎ}らず、周^{しゅう}
囲^いが気づかない困^{こま}り、当事者^{とうじしゃ}である
児童生徒^{じどうせい}自身^{じしん}も気づいていない困^{こま}
りがあります。問題^{もんだい}は、昭^{しょう}和^わ・平^{へい}成^{せい}の
学校教^{がっこうきょういく}育^{いく}は、このような事^じ実^{じつ}を前提^{ぜんてい}
とせず^{じつし}に実施^しされてきたともいえま
す。コロナ禍^かを経ての不登校^{ふとうこう}児^じ童^{どう}生^{せい}
徒^との急^{きゅう}増^{ぞう}は、その教^{きょう}育^{いく}の在^あり方^{かた}が
変^かわっていないことを物^{もの}語^{がた}っている

ともかんがえられます。

ここでのほんしつは、HSP傾向けいこうかどうか

とか、しょう障がいがあるかどうかとかい

うことではなく、たようせい多様性とほうせつせい包摂性が

はいりよ配慮されたがっこう学校きょういく教育デザインである

かどうかというてん点にあり、きょういく教育のぜん前

てい提をか変えることにいみ意味があるとかんがえ

ます。そのためにひつよう必要なポイントが

2てん点。1てん点は、「たがお互いがたがお互いのこま困

りをそうぞう想像しようとするしゅうかん習慣」であ

り、てん2点は、「だれ誰もがじゆう自由にかんがえ、ひと

とこと異なるいけん意見をいやすいあんしん安心・

あんぜん安全なきょうしつ教室きょう環境」です。

しんりてきあんぜんせい心理的安全性がかくほ確保されたきょうしつ教室

は、ひとちがと違いうことをいやすい

きょうしつ教室、じこけつてい自己決定がそんちよう尊重されるきょう教

しつ室、じぶん自分のよさをい生かしやすいきょう教

しつ室、そしてじぶん自分のこま困りがき気になるな

いインクルーシヴなきょうしつ教室。

しんりてきあんぜんせい心理的安全性がかくほ確保されていない

きょうしつ教室とはどんなものでしょう。もし

もきょうしつ教室のなかじどうせいとどうし児童生徒同士のなん何らか

のかんけいせい関係性のためにあつりよくかん压力を感じ、おも

たことがいえないかんきょう環境であったとし

たらどうでしょう。2000ねんだい年代以降、

きょうしつない教室に「むいどてき無意図的にできるじょう下

かんけい関係やかいそう階層」いわゆる「スクールカ

ースト」のけいせい形成について、たたげんきゅう多々言及

されるようになってきています。そ

のどうちようあつりよく同調压力やくうきかん空気感が、とりわけ

せんさい繊細なかんかく感覚のこどもにはた耐えられな

いこともすく少なくありません。

わくにがっこう我が国の学校のおお多くで、これまで

きょうしつ教室というば場は、けっそく結束とだんけつ団結が、

かど過度にじゅうし重視されるけいこう傾向がありまし

た。とりわけせんさい繊細なかんかく感覚のこどもた

ちは、その^{あつりょく}圧力から^み身を守^{まも}るため

に、ときに^{しこう}思考を^{ていし}停止し、^{じこふいっ}自己不

致な^ち行動^{こうどう}選^{せん}択^{たく}を^し強^しい^{すく}られることも少

なくありません。その^{くつう}苦痛^{げんかい}が^く限^{げん}界^{かい}を

超えたとき、^{がっこう}学校^いに行くことができ

なくなっても、ちっとも^{ふしぎ}不思議^ぎでは

ありません。

もちろん、^{たよう}多^た様^{しや}な^{ひつよう}他^お者^うと^お必要^おに^お応

じて^{きやうどう}協^{じゆうようせい}働^いすることの^い重^い要^い性^いは^い言^いう

までもありませんが、こ^{はっそう}こ^{はっ}で^{そう}発^{はっ}想^{そう}を

か^かえて、^ば「場^ばに^お応^おじて^{きやうどう}協^{きやう}働^{どう}するこ

と」と、^{きやうこ}「強^{きやう}固^こな^{だんけつ}団^{だん}結^{けつ}と^{どうちようあつ}同^{あつ}調^{あつ}圧^{あつ}

力^{りょく}」を^わ分^わけてと^{こうしや}ら^{こう}え、^{しや}後^{しや}者^{しや}の^{しや}よ^{しや}う^{しや}に

ならないように^{はいりょ}する^{はい}配^{はい}慮^{りょ}が^ほほ^ほしいも

のです。

2 ^{おとなしやかい}大人^{どうちようあつりょく}社会^{かんが}の^{かんが}同^{かんが}調^{かんが}圧^{かんが}力^{かんが}を^{かんが}考^{かんが}え^{かんが}る

さて、これらを^{おとなしやかい}大人^{かんが}社会^{かんが}で^{かんが}考^{かんが}え^{かんが}て

みましょう。^{おお}多^{ひと}く^{きやうしつ}の^{まな}人^{まな}は^{まな}教^{まな}室^{まな}で^{まな}学^{まな}

び、^{しやかい}社^す会^だへ^だ巢^だ立^だち^だま^だす。^だだ^だと^だす^だれ

ば、^{きやうしつ}教^{まな}室^{まな}で^{まな}学^{まな}んだ^{がっこうぶん}「学^か校^か文^か化^か」が

^{しやかい}社^も会^こへ^こ持^かち^か越^かさ^かれ^かる^かとい^かって^かも^か過^か言^か

ではないでしょう。もちろん^{おとな}大^{おとな}人^{おとな}

^{しやかい}社^{じゆうしき}会^かの^か「常^ち識^い」が^ち家^ち庭^いや^ち地^い域^いを^ち通^ちじ^ち

て^こ子^{しやかい}ども^{てん}社^い会^いに^い転^い移^いして^いい^いく^いこ^いとも

あ^いる^いで^いし^いょう^い。

^む無^い意^{しき}識^{しき}の^{どうちようあつりょく}同^じ調^こ圧^こ力^こに^こよ^こっ^こて^こ自^こ己^こ

^ふ不^い一^ち致^{こうどう}な^{ばめん}行^{けつ}動^{すく}を^{すく}と^{すく}る^{すく}場^{すく}面^{すく}は^{すく}決^{すく}して^{すく}少^{すく}

な^いく^いない^い一^い方^いで、^いこ^いれ^いか^いら^いの^い社^い会^い

は、VUCA (Volatility

(^{へんどうせい}変^ふ動^{かくじつ}性^{じつ})、Uncertainty (不^ふ確^{かく}実^{じつ}

性^{せい})、Complexity (^{ふくざつせい}複^ふ雑^{ざつ}性^{せい})、

Ambiguity (^{あいまいせい}曖^じ昧^{だい}性^い)の^い時^い代^いと^いも^い言^い

わ^かれ^まえ^えす。コ^かロ^まナ^え禍^え前^えは^えも^えち^えろ^えん、

ひがし に ほんだいしんさいまえ
東日本大震災前にまでさかのぼって

かんが げんざい しゃかい ちが
考えたら、現在の社会との違いは

れきぜん がっこう
歴然としています。学校においても

おとなしゃかい へん か たい
大人社会においても、その変化に対

し、そうぞうてき たいおう わたし
し、創造的に対応できる私たちであ

りたいものです。

3 がっこうぶん か てんかん しゅうだんてき ち せい 学校文化の転換と 集 団的知性

ひつよう しんりてき
そのために必要なのは、心理的

あんぜんせい かくほ た ようせい ほうせつせい
安全性が確保され、多様性と包摂性

そんちよう じ ゆう かんが
が尊重された、自由に考え、それ

よ い しゃかい じ ゆう
ぞれの良さが生かされる社会、自由

たい わ そくしん しゅうだんてき ち せい
な対話が促進されて 集 団的な知性が

みが しょうしゅつ
磨かれ、イノベーションが創出され

しゃかい がっこうぶん か へん か
る社会です。学校文化はその変化の

きてん ぜんてい
起点であってほしい。その前提とな

たが たが こま
るのが、「お互いがお互いの困りを

そうぞう しゅうかん だれ
想像しようとする習慣」と、「誰も

じ ゆう かんが ひと こと い けん い
が自由に考え、人と異なる意見を言

あんしん あんぜん かんきよう おも
いやすい安心・安全な環境」だと思

がっこうぶん か てんかん おとなしゃかい
います。学校文化の転換と大人社会

てんかん かくだい せつ
の転換、そのサイクルの拡大を切に

きたい
期待しています。

かんちょう
館長コラム

「^{かいわ}会話」と「^{たいわ}対話」、^{せけん}「世間」と^{しゃかい}「社会」

—^{かんが}コミュニケーションについて考える

こうざい ふくおかけんじんけんけいはつじょうほう かんちょう たにぐち けんじ
(公財) 福岡県人権啓発情報センター 館長 谷口 研二

「^{かいわ}会話がはずむ」とは言うが「^{たいわ}対話が

はずむ」とは言わない、問題解決のため

の「^{けんせつてきたいわ}建設的対話」を「^{けんせつてきかいわ}建設的会話」とは言

わない……。なにげつかわことば

に、^{じんけんきょういく}人権教育で大切にしたい^{たいせつ}コミュニケーション

ーションについて^{かんが}考える手がかりがあり

ます。

^{げきさっか ひらた}劇作家の平田オリザさんが、<「^{かいわ}会話」

の文化は「^{ぶんか}わかり合う文化」、^{あぶんか}「対話」の文

化は「^か説明し合う文化」> ^{せつめい あぶんか}(注) ^いと言うのを

^き聞いて「なるほど!」と^{なっとく}納得したことを^{おぼ}覚

えています。

「^{かいわ}会話」は、^{した}親しい^{かんけい}関係の中で^{なか}交^かわさ

れる、^{たが}お互いが^{おな}同じ^か価値観^{ちかん}をもっている

ことを^{ぜんてい}前提にしたコミュニケーション。

^{かいわ}会話がはずんで^{あた}温かい^き気持ち^もになって

いるときに^{いけん}意見の^{ちが}違いが^{あき}明らかになった

りすると、^き気まずく^{かいわ}なって「会話」が^{つづ}続

かなくなってしまうことがあります。

^{いっぽう}一方、「^{たいわ}対話」は、^{ひと}人はそれぞれが^{こと}異

なる存在だということを^{ぜんてい}前提にして^{おこな}行

われるコミュニケーション。^{たが}互いの^{ことば}言葉

が^{つう}通じ^あ合うとは^{かぎ}限らない。「^{たいわ}対話」は

「^{ちが}違い」に^{きづ}気付いた^{とき}時から^{はじ}始まると^い言う

ことができます。

「世間^{せ けん ゆる}が許さない・世間^{せ けん わら}に笑われる」と
いう言い方^{い かた}があります。「社会^{しゃかい}」がさまざま
な価値観^{か ち かん とくせい}や特性^{とくせい}をもつ人^{ひと}によって構成^{こうせい}され
ている「開かれた場^{ひら ば}」であるのに対し^{たい}、「世
間^{けん}」は「同じ考^{おな かんが}えをもっている（と思われ
る）人^{ひと}の集まり^{あつ}」（「閉じた関係^{と かんけい}」）のこと。
そこは「身内^{み うち}」には寛容^{かんよう}だが異質^{い しつ}な他者^{た しゃ}に
対^{たい}しては同調^{どうちょう}・同化^{どう か し}を強^しいたり攻撃^{こうげき}・排除^{はいじょ}
したり、「他者^{た しゃ}」がいるのにいないことにさ
れてしまう文化^{ぶん か}がつくられていく恐れ^{おそ}があ
ります。

世界人権宣言^{せ かいじんけんせんげん}や日本国憲法^{に ほんこくけんぽう}が、全ての^{すべ}
人^{ひと}の「法^{ほう}の下^{もと}の平等^{びやうどう}」や「差別^{さ べつ}されな
い」こと、「個人^{こじん}として尊重^{そんちょう}される」と
いう考^{かんが}えを示^{しめ}したのは、「違^{ちが}い」を差別^{さ べつ}
や戦争^{せんそう}の理由^{り ゆう}にしたことを反省^{はんせい}し、他者^{た しゃ}
と共^{とも}に生きるための「対話^{たい わ}」を希求^{ききゅう}した
から。社会^{しゃかい}はいろんな人^{ひと}で成^なり立^たってい
ます。多様性^{た ようせい}を漂^{ひょうはく}白^{はく}せず、“あたりま
え”と受^うけとめる学校^{がっこう}や社会^{しゃかい}の在^あり方^{かた}を
考^{かんが}えたいと思^{おも}います。

(注) 平田オリザ『日本語なるほど塾^{じゅく}』(2004NHKテキスト)